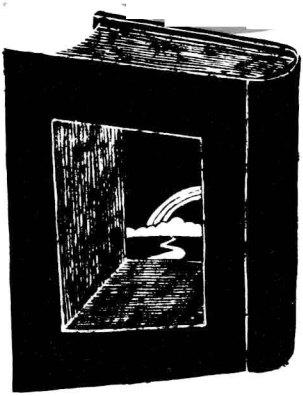
小説の小説

サイデンステッカー著・安西徹雄編訳



南窓社

編訳者紹介

安西徹雄（あんざい てつお）

1933年　松山市に生まる
1958年　愛媛大学文理学部卒
1965年　上智大学大学院西洋文化研究科
　　博士課程修了
1967-8年　英国バーミンガム大学シェイクスピア
　　研究所留学
現　在　上智大学文学部助教授
訳　書　マッキーン「アレゴリー」（研究社）
　　チェスタトン「正統とは何か」（春秋社・
　　共訳・近刊）その他

昭和四七年二月一〇日印刷
昭和四七年二月一五日発行
定　価　八百五拾円
編訳者　安西徹雄
発行者　岸村正路
印刷者　白井倉之助
発行所　東京都千代田区西神田二丁目四番六号
株式会社　南窓社

（製版・印刷・精興社）

0098-800985-5628

目

次

異形の小説 ——実例の散録 7
谷崎潤一郎の文学 ——その一周忌にあたって 35
荷風と谷崎 66
川端康成の世界 ——漂泊と哀愁の文学 79
三島由紀夫の死 114

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

翻訳雑談 138
日本文学の英訳 138
庭のマグワートに虫の音いと繁ければ
——日英植物比較考 162
『蜻蛉日記』の改訳
——翻訳の二つの極 172
名訳の虚像と実像
——ウェイリー訳『源氏物語』再考 184
黒い目で見たアメリカ 196
訳者あとがき 217

異形の小説

異形の小説

——実例の散録——

この研究報告はいくつかの実例をまきちらすことになろう。そのような実例をあげる目的は、日本の近代小説は外国文学のあいだに伍した場合、ときどきかなり異様な姿を呈しているように見えることがあるにしても、自国の小説の中で見れば、それほど奇妙とも思えないということを示すにある。これらの実例を述べたところで、おそらく、だれも今まで以上に日本の近代小説が好きになるということはあるまいが、少なくともそれによって、西洋の読者の慣れ親しんでいる形式やジャンルの概念が、かならずしも普遍的なものではないということを教えられるはずである。それらの概念が普遍的であるべきかどうか——その普遍性を認めない人は無知蒙昧(もうまい)の徒にす

ぎないかどうか――これはまた別な問題で、これについては比較文学の研究者が今後長く討議を重ねることであろう。

ここに調査した実例によって次のことが立証されるはずである。つまり、ある伝統に属している作家たちは、始めあり中あり終りあるアリストテレス流の「詩」を書かねばならぬと考えてきたのに反して、別の伝統に属している作家たちは、ときとして漠然とアリストテレス的なものに到達する場合があるにしても、アリストテレスのいう統一性（ユニティ）という観点から逸脱することを重大な過ちとは思わなかった。この第二の種類の作家たちは、思いついたままに書き始め、予測もできないけいれん的な進行を重ねて、思いついただけの行数を書き終えるとやめにするといった詩的連鎖を、格別とがむべきものと考えたことがないのである。

詩にたいするこの第一の見かたは、良し悪しは別にして、有機的詩観ということができよう。というのは、この見かたによると、いわば詩の頭の周囲が一フィート半か二フィートで、足の長さが約一フィートなら、その中間の部分は当然それに比例した長さを持つべきであって、この人間の全長はせいぜい六フィートでなければならぬと考えるからである。第二の詩観は非有機的である。つまり、鎖の良し悪しは、その個々の環と鎖全体とのつながりによってではなく、一つ一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

つの環の強さによって判定されるというのである。

次はジャンルであるが、それがいかなるものであるべきかという段になると、むろん西洋内部においてさえほとんど意見は一致していない。批評家の中には、ジャンルなどいう観念は一切放棄したほうがよいという有力な一派さえある。しかし、これらの人々は形式上の基準に、つまり統一性や緊張その他に関心を持つ傾向があり、したがって、これらの基準の当てはまる文学作品と、当てはまらない文学作品との区別を暗々のうちに認めている。そのような基準は歴史と告白録には当てはまらないのであるが、しかも、これら両者の中でも、ある種のものは文学としてあまねく認められているのである。

それにまた、形式に関心を集中すれば、少なくともある程度首尾一貫した姿勢を暗々のうちに主張することになる。「詩人」は、実際に自分自身の感情を表白しているにせよ、いないにせよ(特別悲歎に暮れていない人々がきわめて感銘深い悲劇を書きうることをわれわれはみな知っている)、表白しているように見せるか、あるいはまた作中人物を客観化して、かれらがおのれの感情を表白しているように見せなければならない。この二つの方法を混合してもよいが、やりすぎてはいけないのである。

もしも、フィクションとノン・フィクションとの間、あるいは抒情詩と劇との間にあるこういう西欧的な基本的区別を認めるとすれば、東洋においては、ジャンルの観念が精巧すぎると同時に、十分に精巧ではないのである。日本にたいして当てはまることは、大部分は中国にも当てはまるのであるが、ここでは日本の実例をあげるだけで十分であろう。若干の日本の分類、たとえば小説とか物語とかいう分類は、無意味なほど大まかのように思われる。つまり、実質的には一切の部門を含み、西洋の伝統においてもっとも基本的とも思われる境界線にまたがっているのである。それに反して、洒落本とか黄表紙といった分類は、無意味なほどこまかいように思われる。それらは領域が至ってせまく、しかもまことにひねくれたことに、そのせまい領域内においては、物語の領域内におけるとまったく同様に、フィクションとノン・フィクションとを混ぜることができるのである。

これはジャンルという概念が時代によって変化したからばかりではない——そのようなことはどこの国でも起こることである。むしろ、もしそれらの分類方式に共通点があるとするならば、つまり西洋人にとっては無用・無益と見えるにちがいない区別を設けながら、他方ではもっとも基本的な区別を設けていないということなのである。どう考えてもフィクションでない著作が物

語の部類に含まれているのに、純然たるフィクションよりもそのような著作と共通する点がはるかに多い作品が除外されているのである。なぜ『伊勢物語』は物語であって、『和泉式部日記』はそうでないのだろうか。『伊勢物語』には、『源氏物語』とは共通しても『和泉式部日記』とは共通しないものがあるのか。

さらに下って、こまかい区別を設けたあの徳川時代になると、浮世草紙、洒落本、滑稽本、黄表紙というような区別を、主として文学外的な理由――たとえば挿絵の豊富さ、造本技術のちがい、出版の事情や年代といった理由に基づいて設けることが、いったい何の役に立つのか理解に苦しむ。なぜなら、そのように区別された「フィクション」の部門の中にノン・フィクションがまぎれこむことが許されているのだから。平賀源内の滑稽本の中には、創作というよりも論争的エッセイといったほうがよいものもあるし、また浮世草紙の巨匠である西鶴は、長篇小説よりも抒情詩にふさわしい言葉の技巧に魅惑されて、絶えずかれの俳諧的系譜を露呈し、同時にその短い物語の中に作者の論評と前置きの言葉とを充満させているのである。

日本の近代的なフィクションのかなり厄介な特徴の一つは、長篇小説が長篇小説というよりも

むしろ短篇小説集のように見え、短篇小説よりもむしろ小品文集らしく見える傾向である。つまり、一つの小品ないし物語から次の小品ないし物語への転換がゆき当たりばったりのように見え、結末はまったく勝手気ままで、ほとんど結末とも思えない。

もしこれらの難点がただ二流作家の作品にだけ認められるのであれば、とやかくいうには当たらないかもしれない。ところが二流作家は、この上もなく熟練したサイエンス・フィクション作家にもふさわしいほどの器用さでプロットを組み立てている場合が多い。厄介なのは本当にすぐれた作家たちなのである。

おそらくこのような作家たちすべてのうちでもっとも厄介なのは、現代日本が生んだもっともすぐれた作家の一人、川端康成である。かれの作品はいつ完結するのか読者によくわからないし、またかれ自身ある作品が完結したと断言したときでさえ、なぜそれが完結したと見なすのかはっきりわかる場合はまずまれである。『雪國』は一九三八年にはじめて一本にまとめられて刊行された。単行本には一九三五年から一九三七年にかけて雑誌にのった七つの挿話と、それに加えて、一見この物語にしめくくりをつけるためらしい新稿とが収められた。

一見そう思われたのである——しかし、一九四〇年にかれはまた書き始めた。結局一九三八年

の結末を結末にするつもりではなかったようだ。しかも一九四〇年につけ加えた挿話にかれは満足せず、くり返し書き直したすえ、ついに一九四七年続『雪國』として、完成した形におけるこの長篇小説の一見したところ最後の挿話として発表した。

川端氏はいつまた書き出さないとも限らない。この長篇小説の最後の挿話は、織物業の中心地への旅と火事とを扱っていて、少なくともこれは決定的な結末をつけるのに適当な一つの場所であるのに、それを無視して、いぜんとして事態を未決定のままに残している。もしこの小説が、主人公の島村が雪国を永久に立ち去るべき時機が来たと判断するところで終わっていたならば、われわれはその判断を受け入れて、かれとともに去ったことであろう。しかしながら、この小説の「最終」本では、三人の主要人物のだれ一人として、かれらの人生における一つの重要な段階を終えたとは認められない。続々『雪國』への道は、どうやらさえぎるものもなく開けているらしいのである。

全集版の『千羽鶴』は雑誌に発表された六つの挿話から成り、まったく最終的に完結しているように見える。美しい女たちはみな主人公の生活から姿を消して、好ましからぬ一人の女だけが残るということがきわめてはっきりと暗示されているからである。しかし、実はそうではないの

だ。それ以後、川端氏はまた書き出して、結局美女のうちの少なくとも一人はふたたび姿を現わす。追加された諸章はまったく未完で、さらにいくつかの章が追加されても苦情を言うことはできまい。

川端氏の重要な小説中でいちばん長い『山の音』では、それがさらにいちじるしい。この作品はほとんどどこでも途中で止めることができたであろうし、また際限なくつづけることもできよう。『眠れる美女』におけるように、川端氏の作品を読んでこの上もなく緊密な形式的統一性を印象づけられるとき――それ以上一ページ早く止めることも、一ページ長く延ばすことも不可能だったろうと感ずるとき――でさえ、この統一性は実に偶然のように思われることが多い。『眠れる美女』の場合、川端氏はもっとずっと短い物語を計画していたが、その最初の挿話を掲載した雑誌の要請に動かされて書きついだのである。(一見)最終的な形をしたこの作品に緊密な統一性があることは、あらゆる批評家の見のがしえない事実である。しかし、それが川端氏によって計画されたものでないことは、かれのもっとやっかいな長篇小説群の構想と、そのような小説を生み出している伝統とをよく物語っている。

小説の執筆にとりかかるとき、明らかに川端氏はアリストテレス流の「詩」に留意していない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo